



新・モナドロジー



小林 道憲

新・モナドロジー

小林
道憲

存在について

存在は関係である。主語や述語は、関係によって立ち現われてくるものだとみなければならぬ。

実体も関係である。関係の離合集散によって生成変化する過程の一面が実体と見えるにすぎない。あらゆる事物は、他とのつながりの中で自己自身を決定する。

すべてのものが関係性によって生じてくるものだとなれば、すべてのものは生起してきたものであり、出来事である。存在するということは、出来事として立ち現われてくることである。世界は、物によって構成されているのではなく、出来事によって形成されている。

実在は、むしろ、現象としてのみ表出されるものと考えねばならないであろう。

存在は生起し、生成する。存在は生成に還元されねばならない。

存在は生成の瞬間の軌跡である。不断に動く実在を一瞬一瞬止めて見るとき、存在として立ち現われてくるにすぎない。

すべてが生成変化する世界では、 \wedge ある \vee ことは \wedge なる \vee ことであり、存在することは生成することである。

この世界は生成の世界であり、流動の世界である。この世界は、川の流れのように、瞬時も止まることなく変化していく。世界は不動の存在ではなく、絶えず運動し、時々刻々と生成変化する活動である。

個体は関係においてある。関係を離れて個体はない。個体は、自己自身に関係しながら、同時に、他の個体と関係している。個体の状態は、個体と個体の関係性からしか把握できない。

ここでは、事物の個性性も、実体としてではなく、出来事としてとらえられる。出来事が、事物の個性性を一時的に形成するにすぎない。しかも、出来事と出来事は相互に重なり合い、相互に流れ込み合う。一個の孤立した出来事というものはない。諸々の出来事が絡み合い、互いに関係し合っている。そのような出来事の連関から、一つの出来事がすべての出来事を統合しつつ生起してくることを、われわれは、事物の生成として理解しているのである。

この世界に存在するものは、諸事象の関係の結節点として、その都度出来事として現出してくる。諸事象の関係は集合して、一つの出来事として生成し、離散すれば、一つの出来事は消滅する。

あらゆる事物は関係によって成立している。多様な要素の多様な関係が複合して、多様な関係の網の目を作り、多様な相互連関の世界を成立させている。

世界は、無数の出来事の相互連関の世界である。だから、任意の一つの出来事のうちには、他のあらゆる出来事が相入している。世界は、無数の出来事が相互に他を含みつつ生成する世界である。

個体は、相互連関性の網の目の連結点であり、独立した実体ではない。個体は常に他とのかかわりを含み、すべての個体は連なっている。個体と個体は非連続であると同時に、連続している。

世界は、万華鏡のように、無数の事象が映し合いながら生成し続ける場であり、事象と事象が相交わり合いながら不断に自己を生み出していく世界である。世界における諸事象は、他の事象との連関によって動的に変化し続ける運動そのものである。

相互連関の世界では、一つの事象は、他のすべての事象との連関性において、それ自身である。だから、すべての事象には、他のすべての事象が含まれる。

ここでは、存在するものは独立して存在することはできず、すべて連関し合っているから、一つのもの存在にもすべてのものが参加している。自己と他者も、分離することはできない。

事象と事象が互いに働き合う動的相互連関から、世界は不断に形成されていく。無数の事象の相互作用を通して新たな関係が発現し、世界は刻々として新たに創造されていくのである。

相互作用からの自己形成、これが生成する世界の本質である。要素と要素、要素と全体の相互作用から、新しい組織や形態が創り出されてくる。世界は、絶えず自己自身を創出しながら、瞬時も同じ一つのものであることはなく、川の流れるように、常に新しい。

ここでは、部分と部分の相互作用から全体が形成されるとともに、その全体がまた部分部分に反映し、全体と部分の相互浸透が繰り返されることによって、秩序形成がなされる。全体の中に部分があるとともに、部分の中に全体があつて、それぞれ影響し合いながら、世界は形成される。

多様な諸要素が相互に作用し合つて世界を形成するとともに、その世界が諸要素に映し取られて、世界は変動してやまない。われわれは、このような不断に変化し続ける世界の一部である。世界は、刻々として新たな世界であり、片時も一つとどまることはない。世界は、間断なく自己自身を再配置し続ける動的な世界である。存在するとは、このような世界の自己形成の一瞬の軌跡に参加することである。

世界は運動であり、変化であり、生成であり、創造である。動くことこそ、実在である。生成する世界は、絶え間なく新たなものを生み出し、変化し続ける。そこには、予見不可能な創造性と不確実性があるが、しかし、その予見不可能性と不確実性にこそ、自由がある。

宇宙について

宇宙も生成変化そのものであり、流動そのものである。宇宙は、絶えず自己自身を創造していく過程である。世界の中のすべてのものは、この無限の過程の出来事である。出来事と出来事は互いに作用し合って、宇宙の生成変化を担っている。

物質を構成する基本要素は、むしろ、エネルギーをもった各種の場の振動つまり波動である。物質の根源は、共鳴する場の振動によって奏でられる交響曲のようなものとしてとらえねばならない。宇宙は、もはや堅固な物質から構成されているのではなく、根源的な活動力とその相互作用によって形成されている。

しかも、物質は、自分自身の中に秩序形成能力をもっている。そのため、物質は、絶えず複雑さと多様性を増加させていく。

宇宙は、相互に関連し合った諸事象から出来ている。事象と事象は互いに結合し合って、全体を形づくっている。宇宙の中のどんなに小さな事象も、宇宙のすべてのものと密接につながっている。しかも、この事象間の相互連関によって動的調和を保ちながら、宇宙は常に生成変化していく。

世界は、偶然の出会いから一つの方向を定め、もはや歴史的に逆戻りのできないものにまで拡大してしまう。宇宙や物質、生命の形成や進化そのものが、常に偶然に左右されている。

世界は絶え間ない流れのうちにある。世界は、自己自身を生産し、千変万化する生成する世界である。世界は、へあるのではなく、へなるのである。

自然は、自己自身を形成しゆく創造的自然である。

生命について

生命は一つの形成力であり、その力によって物質が編成され、秩序ある構造がつくられて、一つの統一ある形態が出来上がる。その形成力は、質料に形相を与える力である。それが、

物質を形成して、様々な形態を生み出す。形の背後には力がある。生命とは、物質を組織し、個体を形成し、種を形成し、どこまでも自己を創造していこうとする形成力なのである。

生命体は、どれも、周囲の環境と物質やエネルギー、情報を出し入れして自己を維持していく開放系である。しかも、生命体の一つ一つの細胞や遺伝子に分割しても、それ自身がまた周囲の環境と物質・エネルギー・情報の交換をして、一つの秩序立った組織を形成していく開放系である。

主体と環境の相互作用によって常に自らを変化させながら、生命体は自己自身を維持していく。機械論的な生命観では、生命体を各部品から出来ている自動機械ととらえ、周囲の環境との複雑な相互作用を無視して考えがちなものであるが、これでは、生命体の全体をとらえることはできない。生物は、主体と環境の相互作用によって、自己自身を環境に適合させるとともに環境を自己自身に適合させ、自らを維持していく。

宇宙の創造的な力は、動物も植物も含めたあらゆる生命体の身体として表現され、その中に働き出ている。

生命は、何よりも多種多様な形として現われ、そして、それが誕生し、成長し、老化し、死んでいく流動的な過程である。生命は形であり、変化であり、生成である。

動物の行動様式は、その形態同様、絶えず変化する主体と絶えず変化する環境の相関によって決定される関数であり、解がほとんど無限にある関数である。

生命は、絶えず変化するまわりの環境に対して自己自身を改変し、進化という形でも自由に新しい形態を創造し、たくましく生きていく。

生命体の生きんとする方向性そのものは必然であるが、生命体の取りうる形態や方向は偶然性に満ちている。しかし、偶然性を内包しているがゆえに、生命は自由でもある。生命の根源の流れにおいては、偶然と必然と自由は一つである。

進化をモデルに考えるなら、生命現象は逆戻りや再現の不可能な現象である。生命は、常に変化し、常に発展していく動的秩序であり、いつも、一方向的に不可逆に変化していく。条件を同じくしても、完全に同じものが、全く同じ仕方でも繰り返されるといったことはない。不可逆な生命の時間のどの瞬間をとっても、生成発展していく世界の断面が現われる。

生命の時間が不可逆で一回限りのものであるとすれば、生命進化の道が将来どのような道筋を通って、どのような新しい形態を生み出すかは予知することができない。生命進化が取りうる道は無数にあり、樹木のように、どの方向にでも枝分かれしていくことができる。どのような方向へ流れていくかは、その時々々の環境と生命主体の相互作用による。そこには、偶然性が含まれる。そこに、生命進化の不確定性、あるいは非決定性もある。

生命体は、時間と空間の接点において絶えず生成変化していく。生命体は、時間的には持続として、空間的には身体として、宇宙を表現する。この時間と空間の接点のところで、不断の生成は生起してくる。それは、生成することが存在することに他ならない宇宙の自己表現なのである。

宇宙は、休むことなく変化流動している。すべては、水の流れるように変化し、とどまることがない。生成こそ宇宙の原理である。生命体は、流動変化してやまない宇宙そのものの表現である。

死とは、宇宙生命への帰還に他ならない。肉体も魂も、ともに死を通して宇宙生命へと回歸する。そこから生まれ、そこへと死す以上、生と死は一つである。万物は、そこから生まれ、そこへ消滅し、永遠の循環を繰り返す。

精神について

宇宙は絶えざる生成であり、それは、物質として自己を表現し、生命として自己を表現し、精神として自己を表現する。物質と精神を一つに内包しているこの地上の生命体は、活動してやまぬ根源的宇宙の象徴である。

物質は自分自身を秩序化し、自分自身を形成していくが、この物質の自己形成過程の中に意識の根は内在する。物質の中に意識はあり、物の中に心がある。意識されるものが意識するものになり、意識するものが意識されるものになる。それが宇宙の構造である。

この宇宙は、心をもった物、物をもった心によって成り立っている。宇宙は、物と心が一つになっている世界である。物質と精神は、同じ一つの過程の二つの面である。物質と精神は、表裏一体をなして、同じ一つの宇宙の働きを働いている。

脳があるから、知覚や認識、記憶や判断、情動や思考が可能なのではない。知覚し、認識し、記憶し、判断し、思考し、情意を働かそうとするから、脳が出来、それがより高度化するのである。認識し判断しようとする意志が、脳を生み出す。脳の進化の背後には、生命のより向上しようとする志向性があり、より秩序化しようとする宇宙の自己形成力が働き出していると考えねばならない。脳は心の表現なのである。

認識について (1)

感覚は刺激に対する反応ではない。感覚には運動が伴う。動物は、環境の中で動きながら、自分自身の生き方を選択する。それに応じて、動物は、自分にとって必要なだけの情報を環境から抽出するための機能を感覚器としてもっている。

体性感覚は諸感覚の統合の基礎であり、しかも、この体性感覚の根幹は運動感覚にある。もしも、運動感覚を含む体性感覚の統合がなかったなら、あらゆる感覚はバラバラになり、統一したものをもちたいであろう。

動物は、環境内を動き回ることによって、環境の意味を把握する。動物は、単に対象を見て観察するだけでなく、行動して、対象が自分にとってどのような意味をもっているかを知る。動物は、多様な環境の中を、行為しつづつ知覚し、知覚しつづつ行為し、これらを調整しながら、環境に対して柔軟に適応しているのである。

知覚は行為である。行為から知覚は出発するのであって、知覚から行為が出发するのではない。しかも、行為の変化とともに知覚も変化する。

知覚は、主体と環境の循環的相互作用である。しかも、主体も変化し、環境も変化する。動く主体と動く環境の循環的相互作用の中に、知覚は生成してくる。

われわれは、行為することによって認識し、認識することによって行為する。認識するから行為が生み出されるのではなく、行為するから認識が生み出されるのである。

行為は身体を通してなされる。身体は認識の生み出される場であり、認識の背景である。同時に、身体は動く。身体は、何より運動する身体である。この身体の運動性から、知覚は生じる。

過去の経験の記憶は、今ここでまさに起きつつあることにいかに対処するかということと深くかわっている。記憶は単なる保存ではなく、環境の中でどのように行動していくかということと直結している。環境との相互作用の中で生きるということ、つまり、行為し認識する過程の中に、記憶という機能もある。

思考と行動は一体である。動物は行動しながら考え、考えながら行動する。身体行動を通じた思考こそ、本来の思考である。

識別や予見、推理や洞察など、思考は、心や脳の中だけで行なわれているのではない。思考も、環境との相互作用の中でとらえねばならない。主体と環境の相互作用の中で、主体が環境に対して柔軟に適応していこうとするところに、思考は働き出ている。主体と環境を媒介するところに、身体があり、行為がある。思考は、その身体行為と深く結びついている。

行為によって、環境はその意味を変え、新しい環境の意味が発見される。それが発明とか発見と呼ばれるものである。そのことによって、また、環境そのものも改変されていく。

認識とは活動である。主体が行為を通して環境に働きかけ、環境を切り取り、その新しい意味を創造する働きが認識である。認識は、環境の中で主体の行為である。行為と認識は不可分である。環境の中で主体が生きていることから、行為も認識も創発してくる。

発達も、主体と環境の相互作用の中で考えねばならない。環境の中で、行動することによって認識し、認識することによって生き方を獲得する。それが発達である。

生物は、生きのびるために、環境に応じて自己自身を変化させる能動性をもつ。それどころか、生物は環境に対して積極的に適応し、環境を作り変えてさえいく。生命は、よりよく生きようとする能動的系である。そこで生物の側の自発性と能動性を無視することはできない。

認識は、環境から受動的に情報を得る過程ではなく、むしろ環境に対して能動的に働きかけ、環境から積極的に情報を見出す過程である。環境の認識には、生命主体の能動性がなければならぬ。よりよく行動し、よりよく認識しようとすることから、進化も起きる。

行動の進化は認識の進化をもたらし、認識の進化は形態の進化をもたらし、形態の進化は行動の進化をもたらす。行動・認識・形態の循環的な進化によって、動物はより創造的に生きようとしてきた。

人間ばかりでなく、動物の視野は、道具の使用によって拡大する。環境の認識とは、行為の可能性についての気づきであり、それは、道具の発明によって大きく広がる。行為によって世界は開かれるのである。

道具の発明によって、環境の意味や価値が大きく変化する。その面から言えば、環境の意味や価値は、環境の中に客観的にあるのではなく、主体によって積極的に創り出されてくるものである。

人間が技術的能力を飛躍的に開発したことで、人間が世界を自覚したこととの間には深い対応がある。人間が火を発見したとき、人間にとって世界は一変したに違いない。技術を

通して、対象は、われわれ人間に新しい相貌をもって迫ってくる。

人間にしても、動物にしても、それがもつ図式や仮説は道具の発見や製作によって変化し、それとともに世界の意味も変化する。人間も、動物も、身体や道具や介在物を通して外界に探りを入れ、外界を知り、図式や仮説を修正する。特に、動物が高度化するにしたがつて、図式や仮説の変更はより柔軟になり、世界の意味がより自由に変更されるようになる。図式や仮説の変更可能性にこそ、自由がある。

環境の意味と価値は、その中で行為する主体の変化によって変わる。動物主体の発達や進化という事実を考えるなら、環境の意味や価値はそこに客観的にあるものではなく、主体と環境の相関の中で積極的に作りだされてくるものと考えねばならない。主体は、環境の中で行為することによって進化し、環境の新しい意味を生み出していく。意味や価値は、主体と環境の循環的な相関から創発してくるのである。

主体と環境の相互作用の中にこそ、認識は生成する。主体と環境は相互に限定し合い、連関し合っている。認識は、認識する主体と認識される環境の関係である。しかも、主体も動き、環境も動き、関係も動くから、動く主体と動く環境の呼応にこそ認識は成り立つのだと言わねばならない。

主体は環境から切り離された存在ではなく、環境の中で経験を積み成長する生きた主体である。主体は、環境の中で活動することによって、環境を認識する。認識者は認識される世界の中にあつて、認識される世界との相互作用の中で、認識を成立させている。主体と環境は別々に存在するものではない。

主体は、行為によって認識し、認識することによって発達し進化する。しかも、この発達と進化によって新しい世界が開かれ、行為も認識も新しい段階に飛躍する。こうして、主体は環境を創造する。環境が主体をつくと同時に、主体が環境をつくる。環境が主体を形成するとともに、主体が環境を形成する。この相互作用から、主体も環境も自己形成していくのである。

認識について(2)

認識も、世界の相互連関性の中でとらえねばならない。相互連関性の世界では、どの出来事も連関の網の目の中に置かれているから、一つの事象の中には他の無数の事象が映し出されている。世界は、万華鏡のように、無数の事象が相互に映し合う世界である。認識は、事象と事象、事象と世界の相互射映の事態の中に成り立っている。各事象が各視点から世界と事象を映し取ることが、認識である。事象と事象の関係の中に、認識は働き出ているのである。

素粒子、原子、分子、生命、惑星、星、銀河など、宇宙の中のすべての事象は他のすべての事象を映し、かくて宇宙全体を映す。万物は認識し合い、感知し合いながら、生成しているのである。

万物の映し合いの世界としての相互連関性の世界では、一が多を映すとともに、多が一を映すから、まったく同じ一つのものでも、それを見る視点の違いによって、それは異なった相で立ち現われてくる。

知覚が成立する関係性の中には、知覚されるものも知覚するものも含まれている。知覚されるものと知覚されるもの、知覚されるものと知覚するもの、知覚するものと知覚するものなどの諸連関の中で、知覚は成立するのである。知覚は、知覚者自身をも含む事物の関係性の認知なのである。

知覚は出来事である。知覚するものも、知覚されるものも、それらの関係も、それらを取り囲む状況や場所も、すべてが含まれている出来事である。それは、それら多くの出来事の諸連関から創発してくる出来事なのであって、その中に世界の生成過程そのものがある。

認識とは、客観が主観に投射されることでもなく、主観が客観を構成することでもない。むしろ、客観が客観を感受すること、それが認識である。眼が光を見るのではなく、光が光を見るのである。

出来事は、事象間関係の結節点に生じるものである。出来事がまず先にあって、そこから主観も生じ、客観も分かれ出てくると考えねばならない。

われわれは、世界の外に立って世界を観測しているのではなく、世界の内にあって世界を観測している。しかも、身体や観測装置を通して観測しているから、その観測が観測事実に影響を及ぼす。

われわれは、世界の中で行為しつつ認識し、認識しつつ行為し、現実に参加している。認識は行為であり、行為は形成である。行為によって世界は変わる。

運動する身体を通して世界に働きかけ、その中に自己自身を投入することによって、世界は立ち現われてくる。われわれは、世界内で身体を通して行為している生きた主体である。だから、行為の変化に応じて、世界も変化する。

どんなにわずかであっても、行為は仕事をする。そして、仕事は、宇宙の構造に変化を引き起こす。私があるものをちよっと拾い上げただけでも、それだけ私は仕事をし、宇宙の構造を変化させたことになる。われわれは、世界の中で行為することによって、世界の生成に参加しているのである。

世界を動かすものが、世界の中にある。しかも、そのような行為者を世界自身が生み出しつつける。そのような世界では、世界が変わることによって自己が変わるとともに、自己が変わることによっても、世界は変わる。自己自身の行為は、無限の事象の相互連関性を通じて、世界全体に及ぶからである。ここでは、自己は世界に包まれつつ世界を包み、世界に組み込まれつつ世界を組み込んでいる。

宇宙が宇宙自身を認識する者を生み出したのも、宇宙が自己自身を自覚するためであったであろう。われわれが世界内認識者として世界を認識しようとしているのは、世界の自己認識でもある。われわれが宇宙の中に生きているとともに、宇宙もわれわれの中に生きている。

大海原に波が立つことによって舟が動く。と同時に、舟が動くことによっても波が立つ。道があるから私は歩く。だが、私が歩くことによっても道は出来る。世界が動くことによつてわれわれは動く。しかし、われわれが動くことによつても世界は動く。われわれは、そのような世界内行為者なのである。

春が来ることによって、花が咲く。しかし、花が咲くことによつても、春が到来する。

この世界は、自己自身を絶え間なく形成していく創造的世界である。世界がそうであるのは、世界自身の中に、世界を認識する世界内認識者が含まれているからである。

相互作用から自己自身を形成する世界においては、各要素は互いに感知し、互いに知覚し、互いに認識し合っている。この相互認識なくして、自己形成はありえない。ここでは、認識することは認識されることであり、認識されることは認識することである。

多様な要素の相互連関によつて成り立つ世界では、あらゆる要素は相互に映し合い、相互に浸透し、相互に共鳴し合っている。そこでは、海の中で音波を出し、互いに連絡し合いながら集団行動をとっている魚たちのように、各要素は相互に認識し合い、相互に結合している。そのことによつて、世界は刻々として新たに創造されているのである。

このことを突き詰めていくなら、主観と客観、意識と対象は分離することができないということに至り着く。つまり、客観とか対象といわれるものそのものにも、感受作用や知覚作用、認識能力や判断能力を、組織化の階層の程度に応じて認めていかなければ、自己創造的な世界はとらえることができない。主観と客観、意識と対象を分離したデカルト的二元論を克服しないかぎり、生きた世界は理解できないのである。

存ることは知ることであり、知ることは為すことであり、為すことは成ることである。為すことによつて知る。それが、在ることを成ることたらしめている。知ることなくして在ることはなく、為すことなくして成ることはない。

歴史について

歴史は、間断なく生成する出来事から形成されている。ただ、出来事だけが生起してくる。歴史は起こったことと起きることによって成り立ち、しかも、起きることは、それまでの起こったことすべてを含んで立ち現われてくる。ある一つの出来事が生起してくるには、それ以前のすべての出来事が縦横に関係し、孤立した出来事は存在しない。そして、出現してきた一つの出来事は、それ以前の出来事を集約するとともに、新しい要因を一つだけ付け加え、次の出来事に連なっていく。

歴史は、不断に自己自身を形成し変転してやまない過程であり、新たなものを絶え間なく創造していく働きである。歴史は果てしない途上であり、常に新たな創造に向かって自身を駆り立てる生命の活動である。

二つ以上の事象が因果性という必然的關係なしに出会うことを、われわれは、また、偶然と呼んでいる。歴史的な事件は、多くの場合、このような因果系列相互の偶然の出会いから起きる。その出会いからどのような新しい出来事が生じるかは、誰にも予測することができない。

片隅で偶然に生じた事件、片隅で偶然になされた発明や発見など、わずかなゆらぎが、結果として、戦争や革命など歴史の大変動をもたらす。われわれの歴史においては、すべての出来事が連鎖し反応し合っているから、片隅の些細な動きでも、相互連関性の網の目を通って増幅され、大きな変動となって現われる。

歴史にはいくつもの分岐点があり、それぞれの分岐点で、どのような道が選択されるかは前々から確定されているわけではない。分岐点ではあらゆる可能性があり、どの可能性を選ぶかによって、その後の歴史の方向は大きく変わる。現実には一つの可能性しか実現されないが、歴史の進む方向は、その時その時の分岐点では一つだけではない。

歴史のあらゆる時点で偶然が大きな働きをしているとすれば、歴史は非決定的に動いていくことになる。どの出来事も他のすべての出来事との連関によってその方向を決定するか、未来は非決定的であり、それがどのような構造をつくるかは、確定的ではない。歴史

は、無数の出来事の相互作用から自発的に新しいものを創造していく不断の過程である。決定論はこの自発性をつかむことができないため、歴史の次の段階に創発してくる新しいものを予測することができない。

歴史の流れは不可逆である。歴史は、人生同様、逆戻りすることも、繰り返すことも、やり直すことも、取り直すこともできないものである。歴史がどこまでも創造的である以上、歴史現象は再現されることのない一回きりの現象である。無数の原因や条件から思いがけないものが創発してくることを考えれば、歴史は、二度と同じことを繰り返すことはない。

歴史は選択と選択の連続であり、偶然と偶然の累積である。その偶然が、歴史に消し去ることのできない影響を残す。偶然こそ、歴史の不可逆性と一回性を引き起こす。歴史的事実は、過去において作用した無数の出来事の複雑な絡み合いと偶然の競合の結果であり、それ自身は一回的なものである。

歴史は、法則から外れた例外的偶然事や違った系列の偶然の出会い、別様でもありえた偶然の選択などによって、掻き乱されていく。しかし、それこそ、歴史の生成変化と創造的進化を引き起こす原動力である。偶然は歴史の生命である。歴史は偶然によって一変する。

もともと存在そのものが偶然である。出来事が生起し、今このように在ることそのことが偶然である。歴史は、そのような偶然によって貫かれている。

歴史は、創造と破壊を繰り返しながら飛躍する。歴史においてエポック（画期）をなす革命や戦争は、そのような非連続的飛躍の契機である。それは飛躍だから、規則的に起きるものではなく、不規則的に起きる。ここでは、歴史は、それ以前の段階を組み込みながらも、それを超克して、新しい構造や形態を創発していく。それとともに、新しい法則やルールが創造される。歴史は、自己の中から自己でない自己を生み出し、自己自身を超出する力をもっている。

歴史においては、多くの要素の相互作用から、新たな特性や形態、より複雑な構造や機能が、ごく短い期間で、自発的に、そして急激に創発してくる。それは、多くの場合、連続

的变化ではなく、非連続的な飛躍によってなされる。

歴史は絶え間ない流れのうちにある。歴史は間断なく変化しながら、瞬時もとどまることなく流動していく。変転していく定めなき、それが歴史である。しかも、その歴史の流れは、途切れることなく何ものかを創造しようとする流れである。日に日に新しく創造されていく過程の中で、飛躍が行なわれる。

歴史は、変わるものと変わらないもの、新しいものと古いものの対立を同時に含んでいるが、矛盾対立を含むがゆえに生成していくのが歴史である。矛盾は、あらゆる運動と発展の根源である。矛盾を含むかぎり、歴史は命を保つ。

歴史の時間は絶えざる創造の時間であり、非決定的な時間である。各瞬間ごとに新たな世界が生まれている。歴史の出来事は、瞬間において発生する火花である。過去と未来は、この現在の瞬間において接触する。現在は、過去を含み未来を孕むと言われるが、過去から未来への推移には、瞬間の断絶がある。

歴史家が、ある時代やある事件のまとまった像を描きあげるには、事実の海から、それに必要なものだけを選び、他を省略する必要がある。われわれが読んでいる歴史は事実に基づいてはいても、実際には、歴史家の手によって多くの選択がなされてきた歴史である。選択のしかたによって、歴史像は変わる。歴史家は、自分なりの価値判断に従って、多くの史料から重要と思うものを選び、重要でないものを捨てる。そこには、否応なく、歴史家の主観的な価値観が入り込んでくる。

歴史家は、選択し解釈することによって、歴史家であることができる。事実はずらず、語るのには歴史家である。歴史家は、自分自身では経験しなかった事実を、多くの推測を用いて再構成する。歴史的事実は、歴史家によって物語られたものである。

歴史においては、叙述されるものと叙述するものを分けることができない。もともと、歴史的史料そのものの中に、すでに、史料によって語られる歴史的事実と、それを通して語る記述者とが、同時に重なり合って含まれている。さらに、その史料を用いて語られる歴史

史叙述の中にも、叙述されるものと叙述するものが同時に重なり合って含まれている。事実と記述は互いに重なり合って、歴史をつくるのである。

歴史は、過去・現在・未来の映し合いである。過去は現在に流れ込み、現在は未来に流れ込むが、逆に、未来は現在に反映し、現在は過去に反映する。未来への関心は、現在において、過去への関心と接続されている。

歴史事実の一つの経験なのである。過去を想起するということは、現在の経験の中に過去を蘇らせることである。その想起の中には、過去も現在も未来も含まれている。現在は過去に働きかけ、過去は現在に働きかけ、両者とも、螺旋的に未来に向かっていく。そして、絶えず歴史を形成していく。歴史を認識しながら歴史を形成し、歴史を形成しながら歴史を認識していくのがわれわれなのである。

歴史学もそれ自身歴史の中の出来事であり、歴史の内部に息づき、歴史をつくっている。歴史解釈者は歴史の傍観者ではなく、歴史の中で歴史を解釈することによって、歴史に参画している。解釈者は、解釈によって行為しているのである。歴史学は、いわば歴史自身の自己観察なのである。

歴史記述も、歴史家が歴史的事実をどう処理するかによって、どのような物語にでもなる。素材をどう料理するかは、歴史家に任されている。歴史家は事実を作り変えて、物語にする。こうして、物語としての歴史は、歴史的事実とは異なるものとなる。しかし、そういう物語がなければ、出来事に意味を与えることもできず、歴史を認識することもできない。

われわれは、歴史の中にあつて歴史を観測する歴史内観測者である。歴史を歴史の内から見ることは、歴史内観測なくして、歴史をとらえることはできない。歴史を歴史の外から見ることができないのである。

歴史を歴史の外から客観的に認識することができると考え、歴史の必然的法則を打ち立てようとしたところに、近代の歴史哲学の誤りがあった。その近代の歴史哲学も近代という

時代の産物にすぎなかったように、たとえ歴史を歴史の外から見ようとしても、それ自身がまた歴史の中に組み込まれてしまう。

われわれは、歴史の内にあつて歴史を観測しているのから、観測するという行為は、観測される歴史の性質を変える。観測は一つの行為であり、その観測は歴史内で行なわれているために、歴史において観測を行なおうとすると、それ自身が歴史に反映してしまふ。観測者を抜きにして、歴史事実は確定できない。

行為は歴史を開く。歴史は、ただ単に眺められるのではなく、生きられねばならない。生きるということは、ある一定の状況の中に行為を投げ入れ、状況をつくっていくということである。行為し活動することが、生きるということである。行為して活動する人間によって、歴史はつくられていく。

その意味では、状況を切り開き、状況を変革していく行為こそ、歴史を動かす行為として評価しなければならない。行為によって状況は打開され、時代は開拓されていく。だから、時代の流れに抗して、その流れを転換していく行為を、歴史を動かす積極面に位置づけねばならない。

自己の可能性に向けて自己自身を投げ出すという行為が、歴史に対する問いかけを呼び起こし、それが歴史理解となる。われわれは、行為することによって理解し、理解することによって行為する。われわれは、前に向かって生き、後ろに向かって理解する。

われわれは、日々、歴史のただ中を生きている。われわれは、歴史の中で行為しながら、歴史を形成している。誰も歴史の外に止まることはできない。われわれは、歴史の中にいて歴史を動かす歴史内行為者である。歴史の単なる傍観者ではない。

歴史は、絶えず新しい創造に向かって生成発展していく。だからこそ、状況に変化を起し、事態を切り開き、まったく新たなものをつくり出す創造的行為を評価しなければならぬ。歴史は、ひとりでは変化していくのではなく、個々人の苦闘を通して形成されていくものなのである。

歴史は、歴史法則に支配されてはいない。人間は、行為によって、歴史法則を破る自由をもっている。法則を破る自由な行為が、歴史を新しく形成していく。歴史がすでにつくられていることに注目すれば、そこに必然と運命があると言わねばならないが、歴史をつくっていくことができることに注目すれば、そこに自由の地平が開かれてくる。われわれは、必然と自由との戦いを通して、未来を開拓していくのである。

為すことは成ることであり、為すことなくして成ることはない。生成の中に行為があると同時に、行為の中に生成がある。

倫理について

無限の相互連関性からなる人間の社会は、常に変化する流動であり、生成である。それは、多くの相互作用によって常に動いてやまない生成する世界である。社会の各部分、各要素は絶えず動いており、その動きが全体に広がり、社会は絶えず変化し流動していく。

われわれの社会は、秩序ある状態と混沌とした状態の狭間にあつて変動している。というより、秩序と混沌の狭間にあるとき、社会は変動する。この変動の過程では、いつも、秩序と混沌が混在している。秩序から混沌へ、混沌から秩序への二つの動きが相交わって、社会は変動している。

社会の秩序崩壊にしても、秩序形成にしても、どちらも、諸要素の相互連関性の場に個人の行為が投げ込まれることによって起きてくる。ある一人の個人の行為が、重々無尽の相互連関性の場で、次々と他に影響を及ぼし、それが相乗的に作用して、社会の自己形成は起きてくる。

行為は関係によって規定されるとともに、関係は行為によって規定される。社会の変化と創造は、この行為と関係の相互限定から生じる。この点に注目するなら、関係に合わせて行なわれる行為ばかりでなく、関係から逸れて、逆に関係を動かす行為も考えなければならぬ。そのことによって、関係の変動は起きるのである。関係によって行為が変わるだ

けでなく、行為によっても関係が変わる。

行為の意味は、行為が置かれる連関性によって絶えず変換されていく。ある動作がある行為を意味するということは、必ずしも一義的に決まることではない。同じ行為であっても、同じ意味を表わすとは限らない。投げ込まれる場や関係に応じて、行為の意味は常に変動するのである。行為の意味は関係によって決定されるのであり、自己の側にも、他者の側にも、還元することはできない。

行為と関係の相互限定関係から、社会の生成は起きてくる。その意味では、社会の生成・変化にとつて、相互連関性における個人の行為は不可欠である。相互連関性における個人の行為は、どんなにささやかなものでも、その相互連関性を変化させていく。相互連関性における行為こそ、社会の変動をもたらすのである。

われわれの行為は、社会の生成変化を行為しているのであり、大きくは、世界の生成に参加しているのである。

行為が投げ出される場は、諸要素の相互連関によって成り立っているから、一つの要素のわずかな動きも、全体に波及して、全体の変動を呼び起こす。かくて、状況は刻々と変わっていく。相互連関の場は、常に変化し、片時も同じであることはないから、そこに投げ出される行為の意味や価値も、場の変化に応じて絶えず変動する。

行為は無限の相互連関性の中にあり、その中で、評価され、意味づけられる。だから、行為が投げ出される場や状況を考慮しなければ、それがどのような意味をもつ行為かということが決定できない。

投げ出された行為は、相互連関性の世界の中に組み込まれ、現実化する。ここでは、私の行為は、私を離れて、もはや、私のものではない事実となる。私の行為は、相互連関性の中で、多くの他者によって、それぞれの視野から解釈され、あるいは称賛され、あるいは誤解され、あるいは批判され、あるいは糾弾されて、事実として一人歩きしていく。われわれの行為は、現実の障害にぶつかり、偶然事や運命的事柄に翻弄され、多くの他者に別

様に理解されながら事実化していく。

われわれの行為は、状況や時代、さらに自然万物の大きな流れに支えられている。しかし、それは、また、そのような場でわれわれが行為することと別物ではない。生成の中に行為があると同時に、行為が生成を起こす。生成によって行為はあると同時に、行為によって生成は起きる。

この世界は絶えざる変化であり、生成である。われわれは生成の中にあり、生成を行為しているのである。

相互連関性の場は、そこに投げ出されるわれわれの行為によっても変動し、その変動とともに、われわれがもつ価値の表も変動する。そのため、われわれの行為の価値は、変動する連関性とともに、絶えず変動する。

われわれは、ものが相互に関連した複雑な状況のもとに、一つの行為を投げ出す。一つの行為をそのような場に投げ出すということは、現実の状況とそこでの規則に身を委ねることである。それは一つの冒険であって、どのような結果が生じるかは分からない。意志意図し企図した通りの結果になるとは限らない。

行為によって状況は打開され、社会は変革され、時代は切り開かれていく。だから、状況に適合していく行為だけでなく、逆に、状況をつくっていく行為にも注目しなければならぬ。

生成こそ価値の源泉である。常に変転し常に創造する活動性こそ、価値の源泉でなければならない。

われわれは、生成変化する世界において行為していると同時に、このわれわれの行為によって、世界の生成変化そのものが起きてくる。行為のあるべきあり方も、生成の世界において捉えねばならない。

生成する宇宙にあつては、善悪の区別はなくなる。人間の本性が生成する宇宙にその根源をもつていとするとするならば、そこには善も悪も存在しない。生成する宇宙の根源は善悪の彼岸にある。むしろ、相対的な善と悪はこの根源から派生してくるものだとすべきであろう。

宇宙の限らない創造活動の表現として、われわれの行為がある。われわれの行為は、単におのれ一個の意志だけから成し遂げられるのではなく、生成変化する社会や自然や宇宙そのものの支えがあつて成り立つ。行為の価値の源泉も、最終的には、この生成変化する宇宙の根源に求めねばならない。

流れに任す行為と、流れを起こす行為は、一つにならねばならない。流れを起こす行為が流れの中にあり、流れに任す行為が流れを起こす。生成の中に行為があるとともに、行為の中に生成がある。

宗教について (1)

宗教は、大いなるものへの畏怖から出発する。万物に宿る宇宙の不思議な力への畏怖こそ、宗教の本質である。大地に宿る自然万物は偉大な力を持ち、その偉大な力によって、人間に豊かな恵みを授けてくれると同時に、恐ろしい猛威も振るつた。この大自然の力の前で、人間は無力であつた。人々は、この大いなる自然の力を恐れ、大自然の人智を越えた力に畏怖の念を懐いたのである。

宗教とは、大いなるものへの畏怖と帰一、他ならぬ宇宙生命への畏怖と帰一の感情である。

大地の霊力、生命力は、大地から出て、あらゆる生きものの中を通過して大地に帰り、これが永遠に繰り返される。この生命の永遠回帰、永遠の循環こそ、原初の人々が信じて疑わなかつたことであつた。この世界に存在するものがどんなに変転しようとも、宇宙の目に見えない生命力は果てしない循環の中で保存される。

古代宗教は、人間の死も、人間を超える大いなるものへの帰還としてとらえた。死とは宇

宙生命への帰還に他ならない。人間は、宇宙の大きいなる根源から来て、宇宙の大きいなる根源へ帰る。

生と死をはじめとして、人間のすべての営みは、宇宙の循環の中で営まれる。人間が人間として大地に立ったとき以来、諸儀礼は、人間の生そのものが宇宙秩序の中にあり、宇宙秩序が人間の生そのものの中に宿っているということを表現してきた。

古代神話は、事物の存在を（生む）という原理によって説明しようとしている。宇宙の根源に物を産出する無限の力が働き出ており、この生産力によって万物は生成してくると、古代人は考えた。宇宙の生産力は無尽蔵であり、そこから、あらゆるものが生み出されてくる。そこには、無限の生命力に対する古代人の深い信仰がある。

宗教について (2)

死の自覚を通して、あらゆる存在の時間性、有限性、虚無性が自覚され、世界そのものが一つの間いと化したとき、われわれは、自己自身と世界のより根源的な根拠を求める。宗教が生まれ出てくるのは、このような場面においてである。死の自覚がなかったなら、宗教は生み出されなかったであろう。

人生は、また、常に何かを求めながら、それが得られない苦に満ちている。このとき、われわれは、自分自身の人生を重荷と感ずる。さらに、自分の力ではどうすることもできない無力感に襲われ、悩まされる。人間存在の負荷性の自覚も、また、そこを超えて、絶対の自由と永遠なる生を求める宗教心の湧き出てくる源泉である。

解脱とか悟りと言えば、自己の努力や自力の行によって、煩惱の渦巻くこの世の自己を乗り越えて、一切の煩惱が消えた彼岸に到達することだと受け取られがちであるが、しかし、真の解脱や悟りはそのようなものではない。真の解脱や悟りは、煩惱の渦巻くこの世の自己をそのままにして、より大きな世界におのずと生かされることでなければならない。

生も死も、宇宙の根源的生命の場に生かされて一つである。生は宇宙の根源的生命からの

現われであり、死はそこへの帰還であつて、この根源的場では、生死は一つである。自己は、生においても、死においても、この大なる真生命に生かされ、その働きを働く。生も死も、それ自身が宇宙の真生命の働きである。

どの宗教も、宇宙の根源的力への依存を表明している。だが、宇宙の根源的力は目に見えないものでもなく、形あるものでもない。それでいて、それは万物を生み出し、われわれを内から支えている偉大な力である。宗教とは、この宇宙の根源的力に、われわれが全面的に依存しているということへの自覚である。

この宇宙に存在するすべての個体は、大宇宙を映す小宇宙である。万物は宇宙の中に働き出ているとともに、宇宙は万物の中に働き出ている。万物は宇宙の命の表現であり、宇宙の根源的命の活動である。

宇宙の根源的命は無限の活動であり、不断の創造であり、永遠の生成である。それは、相互に連関する無限の事象として表現される。

われわれは、無始無終の無限の時の流れのほんの一息のような短い時の中に生まれ、行為し、そして、死す。しかし、それでも、われわれは、時の中で行為し、時をむしろ形成している。死ぬことさえも一つの行為であり、時の流れを変えている。時はそこにあるのではなく、行為によって形成されるのである。

宇宙の中に存在するあらゆる個体は、それ自身、常に運動し、変化し、行動し、行為することによって、生成変化する大宇宙を表現する。人間の行為も、常に生成流転する大なる宇宙の働きの表現である。われわれは、行為することによって、宇宙の自己形成に参与している。宗教の実践行為、つまり行は、このことを象徴的に表現している。

人間存在は常に生死に迷う存在であるが、その迷いそのものが、宇宙の真生命の表現である。迷いの世界の中にこそ、悟りの世界を見なければならぬ。宗教的世界は、迷いを包み込む世界でなければならない。解脱や悟りと言われるものは、迷いそのものから解放されることなく、迷いそのものの中に宇宙の真生命の働きを見ることなのである。

悟りや解脱の世界は、この世での日常的生から遠く離れた彼岸にあるのではない。むしろ、この世の日常的生そのものの中にこそ、宇宙の大なる働きは働き出ている。日常的生そのものの中に帰ることが、宗教の終着点である。日常的生における一挙手一投足こそ、宇宙の表現なのである。

宗教について (3)

宗教心は、自己の無力や弱さの自覚から湧き出ている。人間は、悪に走りやすく、罪に溺れやすく、煩惱に埋没する存在である。それを自覚するとき、人は自己自身の惨めさを知る。だが、このことは、人間にとって幸いである。人間が自己の無力や惨めさを自覚して、はじめて自己を超えるものに祈り、任すということが出てくるからである。このとき、自己は、自己を超える大いなるものに生かされてあることを知る。この自覚こそ宗教なのである。

世界の多くの神話が語る人間の楽園喪失の物語や墮罪の物語も、人間が世界から離反し、世界から見放されてあるということ、世界から離脱し遠ざかってしまったということの自覚を表現しているとみなければならぬ。神話が創造された原初において、すでに、人間は、もとの全一な世界から分離し、完全さと充足を失った存在とみられている。そして、それを、原初の人々は、罪と受け取ったのである。その意味では、人間は、罪を背負うこととなくして、人間ではありえない。世界から離反することなくして、人間ではありえない。

宗教的真理は、いつも背理を含んでいる。宗教的真理が、逆説でしか表現されないのはそのためである。罪ある者こそ救われるとされるのも、一つの逆説である。しかし、逆説ゆえに、真理は語られる。罪を知る者こそ、神の愛や仏の慈悲を知ることができる。人間は常にその内に罪悪性をもっているが、それゆえにこそ救いがある。ここに、道徳的理性を超える宗教的真理がある。

われわれのこの世での生は罪悪生死の凡夫の生であるが、その有限な生そのものが無限なものに包み込まれているということを、絶対的なものへの信仰の中で自覚するとき、罪悪

生死の生はそのまま永遠の生となる。

人間は、煩惱に惑い、生死に迷う存在である。人間は、煩惱や迷いに遮られて、常に真理を見ることができない。だが、この真理の世界は、煩惱や迷いの世界の裏側に、常に存在している。煩惱生死の世界と救いの世界は、矛盾しながらも接している。煩惱に惑い生死に迷う人間は、同時に、真理の場で惑い迷っているのである。

現代は、得体の知れない盲目の意志に支配されて、どこまでも突き進み、暗い闇の中に突入していかうとしている。その潜在力は巨大であつて、それほど容易に救い出せるものではない。しかし、それでもなお、この無明によつて支配されている現代も、大地へと帰還し、宇宙的生命のもとへ帰ることによつて、浄化されねばならない。現代の無明も、これまでの無明の歴史も、すべてが包まれる世界がなければならぬ。人間の無明の歴史は、そこから生まれ、そこへと帰る。ここでは、すべてが赦されねばならない。人間のすべての罪や悪が赦され浄化される場、宇宙の根源的生命の場は、なお働いていなければならない。